黒幕

藤原審爾

角川文庫

昭和五十三年七月三十日　初版発行
昭和五十四年一月三十日　四版発行

定価は、カバーに明記してあります

角川文庫
黒幕

著作者　藤原審爾
発行者　角川春樹
印刷者　中内佐光
東京都文京区関口一ノ二四ノ八

発行所　東京都千代田区富士見二ノ十三
郵一〇二振東京③一九五二〇八
株式会社　角川書店
電話東京(265)七二一(大代表)

落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan　暁印刷・文宝堂製本
0193-125702-0946(0)

黒　　幕

藤原審爾

その屋敷は六千坪ほどの広さで、中野の街中にある、坪四十万の土地である。それも賑やかな商店街の裏の通りに面している。裏通りに広い私道があり、私道の入口の両脇に、丸い石柱が立っている。ひと抱えほどの太さの、高さ一間余りの石柱で、その右の石柱の面に、無人庵という草書の三文字が刻みこまれている。風雨に晒され、土埃が字の底を埋めている。

その私道の五、六間さきに、寺院の正門のような門があり、ぴたりと門扉を閉ざしている。門内の様子は、まるでうかがい知ることが出来なく、不気味にいつも閑かである。それは街中にある寺とか学校というような在りかたをしている。

裏通りの家々をはじめ、六千坪の屋敷をぐるりと家や病院やアパートがとりかこんで建っているのだが、それらの家の人々も、屋敷の中の様子をうかがい知ることは出来ない。目の前に亭々と聳えた杉の木立が、完全に視野を遮切っている。絶対狙撃が不可能なようにその杉の木立は塩梅されているのである。

その屋敷の中には鮫島台蔵という男が住んでいる。六十年配の頭がばかでかい福助のような体つきの男である。一般の市民たちの間では、馴染みのない男だが、一部の権力階級の連中にはよく知られた人物である。戦後彼は突然、政界財界の寵児として登場した。彼は秘密調査機関をつ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

くり、GHQの高官の醜行を調べ、その証拠書類を売りはじめた。それは利権と交換されたり、政治上の取引の道具にもなり、十分に実効をあげた。彼の周囲には立身欲にとり憑かれた政治家、政商、実業家たちがまとわりつくようになった。

そのうち時代がかわり、GHQはなくなり、鮫島の名は次第に口の端にのぼらなくなった。彼はもともと巧言令色を好まず、社交的でない。公の席へ出ようともしなければ、虚名に少しの興味も持っていなかった。彼は黙々と金儲けに専念し、今では三百億ほどの金を即座にうごかせるほどになった。彼の名はしかし、忘れられたわけではなかった。依然として夜半訪れてくる客は少なくなかった。のっぴきならない事態に追いこまれたとき、鮫島は最高に頼れる人物なのである。彼に出来ないことは、この世の中に一つもなく、彼は資本主義社会の黒い魔神といってよかった。報酬は高いが、殺しの依頼でも彼はひきうけ、それを簡単にやってのけるのである。

彼はこれまで自分がしたいと思ったことを、ただの一度もやり遂げなかったことはないのだが、しかし自分を一種の天才だとも、特別すぐれた男だとも思っていなかった。それが彼の才能の秘密なのだった。彼の大きな頭は、いくらか普通の人間よりも多くのことを考えることが出来、金の力がそれに加わって、かなりの困難な仕事でもやってのけられるだけで、自分ほどの能力のある者は、この世の中にいっぱい居る。彼等が成功出来ないのは力といってよい程度の金を持っていないからだと、彼は思っている。それが彼を極端に用心深い人間に仕立てあげていた。つまり

彼を殺せるような人物が、たくさんこの世にはいるのであり、どこかの誰かがそんな男をつかって自分を狙わせるという危険を感じないではいられないのだった。

実際、敵は数えきれないくらいあるのであり、四十をすぎた頃から、彼は次第に危険な外へ出るのがいやになった。この屋敷の彼が住んでいる一ト棟は、一見和風な平屋だが、実は堅牢な鉄筋コンクリートの建物であり、ボタンひとつで、窓という窓に鎧戸が下り、出入口が閉まるようになっている。鎧戸は二重で、鎧戸が下りると、その棟は防火金庫のようになるのである。

鮫島台蔵は、建坪三百坪ほどの屋敷の中に、八人の男と二人の婆やを傭っている。男たちのうち、二人が秘書で、一人は板前、あとの五人は用心棒といってさしつかえのない連中である。もしも一人でも裏切れば、彼の命は簡単になくなってしまうので、これらの連中は、そういう裏切りが不可能な条件の持主ばかりである。もし彼が死ぬようなことがあれば、秘書を除いた六人の男たちは、たちまちサツから追われなければならなくなる。自動的に、彼等の過去の犯罪が警視庁へ届けられる仕掛けになっている。秘書の二人のうち一人は彼の従兄であり、もう一人は彼の後継者をねらっている、実に有能な男である。加瀬は四十すぎだが、独立するよりも鮫島の許で才腕をふるうほうが、自分の能力をはるかに十分に発揮出来るということを知っている。そして鮫島の寝室の下にある地下室には、戦後間もない頃から二十年以上もの間、鮫島が調査した知名人、要人たちの犯罪記録が詰まっている。どの一つをとりだしても、当人を楽々と失脚させるに

足る証拠品なのである。加瀬はそれをねらっているため、なによりも鮫島に信頼されることが必要なのであり、忠実であらねばならないのだった。

鮫島台蔵は年にほんの数度しか屋敷から出ない。屋敷にいる限り彼は安全なのだが、一歩外へ出ると、彼の用心棒たちも彼の命を守りきれるものではない。しかし彼は、死ぬことに恐怖を感じているのではなかった。彼は殺されることがいやなのである。自尊心が許さないのである。自然の死は神の意思だが、殺されるというのは、彼と同じ人間の意思であり、そういう手合いの希望を実現させるのが承知出来ないのだった。他人を干渉しても、他人から干渉されることが、彼は嫌いなのである。そこで彼は、六千坪の敷地の中に、彼の王国を創りあげたのだった。住民はごく少数だが、彼の命令は絶対である。地球上に彼ほど絶対的な権力を持った王は、多分、最早いないだろう。

鮫島台蔵は、そういう生活に満足しているわけではなかった。もちろんもっと広い王国がほしかったが、彼は五十をすぎた頃から、あくなき前進に熱意をうしないはじめた。たとえば一兆の金があっても、たかが知れている気がしはじめたのだった。それと同時にあらゆる欲望が衰えだした。女にもほとんど興味を持たなくなった。

彼は三十年ほど前までに、人並みに三度も結婚したのだが、最初の妻はあまりに無能なので、たちまち追い出してしまった。二度目の妻は、彼の身勝手さに呆れて、自分から去っていった。

むろん彼は自尊心を傷つけられ、彼女が再婚した相手の男を、金と女で堕落させてしまい、公金横領をせざるを得ないところへ追いこんだ。そして彼女を結局自殺させて溜飲をさげたものだった。三度目の妻は、ただ金目当ての油断も隙もみせられない女で、ほんの半年で彼は叩き出してしまい、それから三十年間、女に期待したりする愚かな真似をしなくなった。いまも彼は五人の女がいて、それぞれ旅館や銃砲店や待合などの商売をやっている。彼は必要なとき、女たちを呼びつけるのだが、このところ滅多に呼びつけなくなっている。欲求がおこらないのである。

しかしといって鮫島台蔵は、欲望が衰え、なにもする気がなくなったのではなかった。むしろこれまで困難すぎて、手をつけられなかったことを、密かにやりだしていた。美術品の偽造である。五年ばかり前、余儀ない事情で応挙の屏風を買わなければならなくなった。鶴の絵であり、片脚をあげた鶴を眺めていると、ふと鶴の鼓動が聞えるような気がした。彼はこれまで美の世界とはまるで無縁であった。絵一枚に何百万、何千万の金を払う神経が理解できなかった。しかし彼は初めて美のどこかにふれ、その屏風を愛しはじめた。ところがその絵は、生憎にせ物だった。それを応挙に明るい人物から教えられたとき、腹を立てるよりもはやく、復讐の念にとり憑かれたのだった。彼はにせ物を博物館に並べてやろうという気になり、突然、美術の勉強にとりかかった。幾人もの美術評論家や学者を傭い、講義をさせた。二年ばかりもそれがつづいた。

その男は運のわるい陶芸家だった。

その男は、偶々美濃で生れたために、子供の頃から陶芸をやらされた。生憎その男は才能を持っていたばかりに、高校を卒業すると倶に、土地の窯元で働きはじめた。そこにも不運が彼を待ちうけていた。その窯元は、量産の窯元で、彼のオリジナリティなどをまったく必要としなかった。彼に与えられた仕事は名品のイミテーションをつくることだった。彼はまだ二十歳まえで、柔軟だった。その仕事に興味を覚え、かなりの給料を貰えることで、夢中で仕事にはげんだ。彼はそれで模倣の才能をのばすことが出来たかわりに、本来の個性的な才能を失った。彼は二十年ちかくも雑器に名品の意匠を写す仕事をつづけてきたのだが、そのうちにただ写すだけでは物足りなくなった。そして密かに名品そのものと自作とを競わせるようになった。名器そっくりのものをつくりはじめたのだった。

そういうことを思いつくことばかりでなく、それを実行するほど、その男は世間知らずのいびつな男なのだった。出来上った作品のいくつかを買っていった者がおり、それがこの一、二年、出まわりだし、その一つがある美術館へ本物として飾られてあるのを、彼は偶然発見したのである。彼はそれを不用意に自分の作品だと教えたことから、問題が複雑厄介になった。意図的に贋作を彼がつくったと言われだしたのだった。彼はあちこちから非難されはじめ、思いがけない成り行きに錯乱してしまった。そして彼はある夜、酔っぱらって出かけた彼の後援者のマンション

のエレベーターの中で、乗りあわせた女を夢中で絞め殺してしまったのだった。泥酔していた彼が、よろめいて彼女に抱きつくと、突然、女が悲鳴をあげだした。彼はこのうえ痴漢と呼ばれてはおしまいだと思った。むろん殺す気などなく、ただ黙らせようとしたのだが、その揚句われをうしない、絞め殺してしまったのだった。

いくらか幸運だったのは、彼の後援者の大蔵省の高級官僚が、そのマンションの部屋と若い女とを、関係深い会社から贈られており、それが公になることを怖れ、彼を自首させず、六千坪の屋敷へ連れていってくれた。そこでしばらく暮したあと、彼は笠間のほうの山荘へ移され、そこへ妻を呼んで暮らしはじめた。それをはたして運がよかったといってよいものか。彼に与えられたのは、安全と収入のよい暮らしのほか、贋作造りという仕事だった。彼は幸不幸はともかくその仕事に異常な情熱を感じた。彼の作品を勝手に美術館へ飾った美術評論家たちが、贋作だとわかるとたちまち非難を彼に集中することで、自分の失敗を切り抜けようとしたのを、彼は許すことが出来なかった。彼はもっと完全にその連中の無能さを暴露してやりたかったのだった。彼は仕事に専心した。それから五年の歳月が流れた。

鮫島台蔵は、特別のことがない限り、目が覚め、起きたくなるまで、寝床の中にいる。朝ははやく起きだすこともあれば、昼すぎに起きることもある。そして目を覚ますとまず新聞に目をと

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

おし、それから食事をとる。新聞を読むのに二時間ばかりかけ、食事に一時間ほどかける。食後しばらく休んだ頃、加瀬がやってきて、今日の予定や訪問希望者の名を告げる。鮫島は十一の会社をやっており、月例の役員会を自宅で開き、それへ顔を出すので、三日に一回はその会議がある。それに日に一件くらいのわりで、金を借りる客がやってくる。それに彼の力を借りたがる連中も訪れてくるので、なんとなく一日がすぎ、夜になってしまう。さらにこのところ、彼は一人の画家に目をつけ、その画家を利用する機会をねらっており、その指揮を自分でとっている。その画家は日展系の、わりに写実的な絵を描く男で才能もある。しかしその画家は不遇時代に、三点の贋作をつくっており、それをあつかった画商に、その絵を鮫島は集めさせている。それが手に入れば、その画家を彼は多分自由に操ることが出来るはずだった。

その晩秋の小春日和の朝、鮫島はめずらしく機嫌よく目を覚ました。目を覚ますなり鮫島はにやりと笑った。鮫島はもう何年もほとんど陽に当たらないので、蒼白くぶよぶよした顔になっている。坊主刈りにした鮫島の顔は、破戒坊主のような暗く陰気なかげがあり、尋常な人間とは思われぬ生臭い血の匂いがする。広い額の下に、眉や目や鼻がぎゅっとつまっており、ほとんど表情というものがない。彼にとっては表情は、追従なのであり妥協以外のなにものでもない。彼はいつも自分の考えでしか行動しないのであり、妥協追従は彼に向かって他人がすることなのである。そういう暮らしを永年つづけてきたせいで、彼の顔にはそういう生きかたが傲慢に出ている。

それが威圧感を与えるばかりではなく、義理や人情で密着することを拒否している。人間ばなれした蒼白いぶよぶよした顔なのである。

鮫島台蔵はその顔に薄気味わるい笑いをうかべるほど、今日という日をたのしみにしていたのである。半月少々まえ、彼の座敷から彼の従兄にあたる秘書の細川が、古ぼけた灰色のコートを着て、かなり大きな包を大事そうに抱えて出ていった。もう七十ちかい盆栽いじりの好きな、日灼けした老人の細川は、そのまま銀座へ出かけて行き、知名な美術品店を訪れた。そして彼は訥訥と長い口上をのべた。彼は瀬戸内海の塩飽の者で、今度、下津井、高松間に有料橋が出来ることになり、彼の家はその足げたをたてるために、立ち退かなければならなくなった。ところが蔵の整理をしているうち、こういう古陶が十点余り出てきた。これまで高松の骨董屋が、十万という値をつけ、京都の美術品商は百万という値をつけた。あまり差がありすぎるので、もしかするともっと高価な品かもしれぬと思い、そのひとつを持ってきたとのべた。

塩飽衆といえば、瀬戸内海の海賊で、朝鮮征伐の砌の水軍である。おどおどと老人が出した作品を見て、支配人はおどろいた。古萩の茶碗と丼である。土は鉄分をいくらかふくんだ灰褐色の荒くかたい重い土であって、大道土より以前のものである。部厚く豪壮なものである。いま一つの丼は、鬼萩である。荒い小砂がわずかにまじった土で、釉は枇杷色に白がまじって貫入が入っている。力づよい轆轤目が入っており、鬼萩にしては品格上々の出来である。折悪しく主人が

不在のため、正確な値は申し上げられないが、百五十万以下で手放されるような作品ではないという答だった。彼はその足で新橋、六本木をまわり、四百万でその二つを手放して戻ってきた。成功である。しかもその成功にはおまけがついたのだった。三日まえ、蘇我美術館での古陶展の写真が新聞に出ており、その丼のほうがれいれいしく紙面を飾っているのだった。

鮫島台蔵は、かれこれ二千万以上の投資をしており、もとより採算はまるで合わないのだが、いってみれば彼の唯一の道楽なのであり、しかも彼のねらいは、世界の美術書に掲載されるような贋作をいっぱいつくってやることなのだった。そのためのこれは試金石なのだった。

これまで彼はただがむしゃらに前進してきており、たとえ牧場や会社を乗っ取った時でも、その成功のよろこびにひたったりしたことはなかった。いくつかの仕事がくつわを並べて進められているのであり、そのうちの一つが成功したからといって、格別どうということはなかった。北海道の牧場などは、十年以上まえに彼のものになったのだが、いまだに彼はその牧場を見たことがないのだった。一つかたづけば、すぐそのあとに新しい仕事がおかれるだけである。しかしまったくおかしなことには、彼はどうにも彼の製品がれいれいしく飾られているところを、自分の目でたしかめたくなった。彼はもともと欲望を抑えることが出来ないたちである。彼が政治家を志さなかったのも、大企業をつくろうとしなかったのも、自分が欲望を抑えることが出来ないたちであり、巨大な組織や政府の要職につき、範をたれることの出来る器でないことを、熟知して

いるからだった。それにしても、彼はもう六十なのであり、自分の製品を見たいという子供じみた欲望を、抑えることが出来ないほど、理性がとぼしいわけではない。むしろそれは異例のことなのだった。そしてその気持ちを抑えかねた彼は、昨日、その美術館を持っている知名な建築会社の会長の許へ電話をかけて、今日の五時すぎ古陶展を見に行くことを知らせておいた。五時すぎというのは、閉館後に行くから開けておけということである。この会長は、十五年まえの夏、彼の許へやってきて、三拝九拝したことがある。彼の建築会社が、ごく一部だが、電話局の用地の上にビルを建ててしまったのである。六階建てのビルが、約半米（メートル）ほど、電話局の私道にくいこんでおり、その用地を電話局から買い取りたいという依頼だった。

十年ほど前からその私道を古い建物が占領しており、建物を解体した時に返却するというとり決めがなされており、その契約書を若い役人が発見し、問題化したのである。鮫島は、改築費用の三分ノ一でそれを請負い、最も簡単な方法で解決してやった。その契約書がある日、姿を消したのである。えてしてこういう方法は、コロンブスの卵と同様に、気がつけばごく容易なものである。その会長も、口がかるい男で、彼にしてやられたと洩（も）らしている。多分それも、いくらか彼の機嫌をそこねていたものだろう。

彼は中野の屋敷から、四時すぎ、羽織袴（はかま）という姿で、特別製の車に乗って、裏手の崖下（がけした）の路へ出た。彼の屋敷は小高い丘を平坦（へいたん）にしたもので、裏手は十米ばかりの崖（がけ）になっている。その崖の

下の路へ出る隧道が裏庭から掘ってあり、それが彼の道路になっている。

彼の車は黒塗りのリンカーンで、完璧に防備出来るようになったものだが、三人の用心棒たちがその車の中へ乗りこんで行く。彼の左手に一人が腰かけ、彼の前の助手席にもう一人が腰かけ、あとの一人が運転をするのである。

鮫島台蔵は、街の風景などにまるで関心がない。車に乗りこむと、たいてい目を閉じ、少しずりこむように背をもたせかけている。これから出かける先での仕事について、あれこれ考えるのだが、今日はその必要がなかった。そこで鮫島台蔵は、出しなに電話をかけてきた太田黒のことを考えはじめた。

太田黒は政商で、土地会社を営っている。このところ羽振りがよく、彼の会社はテレビ、新聞に大々的な宣伝をやっている。鮫島が最初に太田黒と会ったのは、もう二十数年まえである。その頃、太田黒は満州から帰ってきたばかりで、満州浪人とでもいう感じがむんむんしてくる男だった。太田黒はテレビの会社をつくるというグループで働いていたのだが、結局その満州浪人風なところが敬遠され、いざテレビ局が出来上った時には、わずかな金で縁を切られてしまった。その折、太田黒はこのままではすまさんとか、生かしてはおけぬと息まいていたが、実際人間の運ほどわからぬものはない。そのわずかな金で太田黒は不動産会社をはじめたのだが、二十年ばかりの間に、事態は逆転してしまった。太田黒は土地会社のほかに、土地造成の会社と建築会社

を持ち、全国的な会社になった。彼を敬遠した仲間たちは、テレビの発展と共にそれぞれ役員になり、一応の地位を得たが、その過半は新旧交替で、いまやほとんど姿を消してしまった。太田黒の会社で働いている者が二人もいる有様になっている。しかし太田黒は、曾ての怨みのために、そういうことをしているのではなく、そういうことを平然と出来るほど、名実ともに大きくなったのである。彼が電話に出ると、その太田黒が、

「これからいってもいいかね」

と言った。約束でこれから出かけるところだ、八時に帰ると答えると、

「それでは九時にうかがおう」

と太田黒は電話を切った。

太田黒が電話をかけてきたのは、十か月ぶりくらいである。普通なら、元気かねとか近頃どうしてるなどという挨拶からはじまり、ちょっと話があるのだが、都合はどうだろうというふうな電話になる。しかし先ほどの電話は、いきなりこれから行くというところからはじまった。緊急な用事で、しかも余裕がないといってよい話である。足許をみられても、しかたがないほど、太田黒はあわてているのか、のっぴきならなくなっているかである。いったいどういうことなのか。昨年の太田黒の仕事のうわさを思い出してみたが、これというわさもない。しかしこれは、相当な仕事だと、永年きたえた勘が囁いてくるのである。鮫島は、実際、親しい人間などというも

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com